

巻頭言

異が交わる多様性と協同の価値

古村 伸宏 (ワーカーズコープ連合会理事長／協同総研副理事長)

アメリカ大統領選挙が本格化する中、トランプ前大統領の襲撃とバイデン大統領の撤退というニュースが世界を駆け巡った。日本においては不適切な選挙運動と、候補者の振る舞いや言動がSNSを通じてバッシングの標的となっている。世界ではウクライナやパレスチナ・ガザでの軍事行動による凄惨な殺戮や破壊など、分断と対立の構図が広がっている。

分断は対立を一層激化させ、憎悪を深める。こうした構図は、人類共通目標だったはずのSDGsの達成を、極めて困難に追い込む要因ともなる。

世界を覆う人間の対立構図を読み解き、利己を抑制し共存を呼びかけることは、もはや地球上の多くの生命存続へと連なる課題である。そのためには、支配と分断の歴史を紐解くことが不可欠である。歴史を紐解くことは社会の構図を知る基礎となるが、一筋縄ではいかない。歴史は立つ位置によって景色が違い、主体によって実感が異なるからだ。そこには絶対的な正義は存在しない。唯一譲れない評価点があるとしたら、それは「命」の扱いを巡ってだろう。時として歴史は、為政者や特定の人たちに都合のよい情報に塗り固められる。そこでは零れ落ちる

小さな歴史の事実が存在する。これから紐解くべき歴史に対する作法は、こうした無数の小さな歴史にも目を向け、視界を360度に広げる必要がある。こうした作法は、研究という営みには一層求められているだろう。

歴史の事実を集め、持ち寄り、その総和の歴史を探究することは、これからの未来を思考する作法も磨くことになる。事実を知る努力に注力し、具体的なこれからを構想し実践していかなければならない。分断の歴史と対立の実態を知るとは、人と地域を知ろうと努力する協同労働の実践にも通ずるテーマである。

人間とその社会の営みを捉え直す上で、もう一つの欠いてはならない視点は、自然環境の中における人間という生きものの振る舞いである。人間と他の生き物(ここには植物や水・空気といったものも含まれる)の関係の変遷は、人間の対立構図を読み解く上で重要なエッセンスである。今日、自然を支配したと思い込んだ人間とその社会が引き起こした危機の必然性をどう捉えるか、が核心点である。共存・共生という大きな関係の中にある生態系という循環は、本来人間の協同性と連帯感の源泉とでもいうべきもの

である。昨今人間関係における「多様性」は重要なトレンドである。自然界の持続可能性は(生物の)多様性を前提としており、人間の体内や社会もまた同じである。人間の協同性もまた、自然の中の関係性を前提としているとしたら、今日「多様性と協同の探求」こそが、根底に横たわるテーマと言えるのではないだろうか。分断と対立の構図も、このテーマから解きほぐしていかなければならない。こうした志向は、根底的な価値観の見直しという側面が強いように思う。しかしそれは、昔に戻るというより、私たちの生きる営みの土台を組み直すことであり、その社会化は数代の時間を要するだろう。

こうした時代的・社会的な様相の中で、日本における労働者協同組合法の施行と、そこから生まれ歩み始めた組織はどのように評価できるだろう。あるいはこれを促進し活用しようとする、自治体をはじめとする人々の意識と関心はどこに向かおうとしているのか。これを見つめる人々の眼差しはどんな思いを抱えているのか？ 私たちは、法制定を運動化し実現させてきた主体として、自らを主語に実践を語り、法活用も呼びかけてきた。その意味で労働者協同組合の価値は、その前史を経験した者による過去を前提としていた。しかし、新たな歴史の主体者が広がる中で、労働者協同組合の評価は、今ある胎動の中からも見出す時を迎えている。例えば、新法人の構成員は圧倒的に副業(複業)スタイルが多いという実態

はどう評価できるのか。単に稼ぎが脆弱ということや片手間というだけではない、本質的なニーズが眠っているようにも感じる。あるいは、広島市で始まったシルバー人材センターへの協同労働の導入や、各地での任期付き公務員や地域おこし協力隊を主体とする労働者協同組合の広がり、人間という生きものの高齢期のあり方の模索であり、人間の社会における公共(みんなに関わること)の担い手・担い方へのアプローチの入り口とも捉えることができる。それらは「生きる場所」の模索とも重なる。いずれにしても、多様な主体と多彩な事業活動の広がり、 「地域づくり」「自治の推進」「民主主義の探求」といった共通の指向性を持っている。これから拓かれる歴史の評価は、こうした視点を大切に、問題や課題にフォーカスするというより、小さな可能性のかけらを拾い集めると、どんな具体的な希望を形成しうるのか、という点への眼差しが大切になってくる。これは、多様性に価値をおく人間関係やコミュニティのあり方と同心円状にあるテーマだ。

再び世界的な構図に目を向け、持続可能性を決する要素としての「生物多様性」へのアプローチがもたらす、分断と対立の構図の解消に迫る。

実現可能性が危ぶまれるSDGsの重要不可欠な要素として、「気候変動」と「生物多様性」があり、そうした位置づけの政策やアクションが世界で広がってい

る。「気候変動」の中心テーマは「脱炭素」「CO2削減」「エネルギー転換」が語られ、既に多くのチャレンジが試みられている。「生物多様性」というキーワードの認知度は高まりを見せ、水資源の保全などが世界で取り組まれている。

しかし、気候変動に特化した取り組みは生物多様性に悪影響を及ぼす場合が多いという。逆に、生物多様性に絞った取り組みは、結果的に気候変動策に波及効果を及ぼすことが多いという[※]。このことは、分断と対立の構図を解消するアプローチのあり方に、重要な示唆を与えるように思う。それは、様々なテーマの構図を考え、関係性を捉えるということであり、総和的な歴史を捉えようとする心意気にも関わる。こうした異なる専門領域の関係性を捉えようすることは、研究領域においても「異なる専門性の協同」が不可欠ということの意味しているのではないだろうか？そこには、これまでと異なる「研究の作法」が形成されていくだろうし、協同総研にとっては研究所及び協同の総合的な研究のあり方にも実践的に求められていくように思う。

労働者協同組合の新しい歴史は、これを対象とする研究活動の新しい歴史も導き出す。また協同労働の実践は、労働の

領域を広げ、労働を媒介とする多種多様なテーマをつなげる。これは歴史と実践を往復する作法ともいえる。

ワーカーズコープ連合会としては、歴史的にも最も困難な課題の一つであるパレスチナの学習会を8月6日に開催する。そこではまず「知る」ということを重視するが、「知り方」「知る中身」も重視したい。振り返れば、東日本大震災以降の連合会方針の中心は「食・エネルギー・ケア」の自給・循環であり、これを個別ではなく統合的に捉え実践することと呼びかけてきたが、個別の取組に止まる傾向がある。ここには気候変動と生物多様性の関係に似た傾向が潜んでいるように思う。そして、人間を人間足らしめた原初的な営みは「食とケアの協同」と言われることを重ねると、まさに「統合的な協同の作法」を編み出すことで、人間性とは何かを問い直していくことが始まるように思う。こうした「協同」へのアプローチを、協同総研における国際協同組合年(IYC2025)のテーマの一つに据えることができれば、現場と世界をつなぐ研究所像が展望できるのかもしれない。

※「生物多様性と気候変動IPBES-IPSS 合同ワークショップ報告書(IGES)